



猫花文庫

no.262-264

山 猫 衆

佳 (Kei) 作



猫花書店



時は後奈良天皇、将軍足利義輝の御代。  
戦乱続く世の出来事でございます。

上野国から信濃国へと通ずる裏道を歩く、ひとりの女の姿がございました。  
その背には大きな袋がひとつ。両の肩には振分けの荷があり、足取りは大層重うございました。  
身には襦袢を纏い、汚れ糞れた顔をしておりましたが、きりりと固く結ばれた口許には、並々ならぬ決意が、込められておりました。

暗い道の端に、ちいさな沢が流れているのを見つけた女は、その脇でひと息つくことにいたしました。  
振分けの荷をどさりと落とし、背の袋を、そうっと前抱きにして、沢に屈んで水を飲みました。  
そして、その袋の中を覗き込み、微かに笑みを浮かべたのでございます。

その時でした。

「おう、女だ、女だ」

背後の藪から、声がしたのでございます。  
女が仰天して振り返ると、そこには、獣のような姿をした、ふたりの男がおりました。  
黒く煤けた顔にららんと光る眼。手には大きな鉈を持っております。  
女は袋を抱きかかえ、走って逃げようといたしますが。  
男等は手を大きく広げて、女を囲みます。

「おお、女だ。ほんとに女ひとりだな。連れはいねえな」  
「そうだひとりだ。ひひひ、こんなこたあめったにねえ」

男等はじりじりと女に近づきます。  
その怖ろしさに、女はとうとう、ぺたりと座り込んでしまいました。  
両の手には、しっかりと袋が、抱きしめられておりました。

「おれが先だぞ」  
「なにをぬかす。おれが先だ」

男等が今にも飛掛らんとしたその時。

「おまちよ」

沢の上で、声がいたしました。  
凜と響き渡る女の声。

「なんでえアカメじゃねえか」  
「邪魔するねい」

男等が言う間も無く、アカメと呼ばれたその女は、ひらりと舞って男等と女の間而降り立ちました。

「お前等の眼は節穴かい。こんな裏道を女ひとりで通るなんざ、余程の事さ。いい金蔓になるかもしれないよ」

じろりとアカメに睨まれて、男等はぐうと唸ります。

「いいじゃねえか、ちっとくらい遊んでもよう」

「そうだ、頭だってそんなくらは許して」

「お前等の遊びが過ぎて、この女を殺しちゃったら元も子もないじゃないか。おら、とっととその女ふん縛って、頭ん処へ連れて行くんだよ」

男等をびしゃりと叱りつけると、アカメはかがみ込んで、女の顔をじろりと眺めます。

「ふうん、やっぱり只者じゃないねえ」

そうして、女が持つ袋に手を掛けようとしています。

「ぶっ、無礼者ッ」

女は鋭く叫んで袋を庇います。

その時。

「おんぎゃああああああああ」

大きな泣き声が、響いたのでございます。

「なんだあ」

「赤子かえ」

男等は度肝を抜かれて、立ちすくみました。

「...なるほどねえ」

アカメは、目を細めて、にたりと笑ったのでございます。

\* \* \* \* \*

山深い谷の奥底に、小さな集落がございました。

そこは裏街道を通る者共を襲う、山賊共の住処。

どの村々からも遠く離れ、道は藪に隠されて、容易に辿り着ける処ではございません。

陽がとっぷりと暮れて、ひとつの小屋にだけ、灯りが点っておりました。

粗末な小屋の囲炉裏端には、醜い顔をした男共が集い、酒をあおって騒いでおります。

土間には、先に拐かされた女。その腕の中には赤ん坊。

直ぐ後ろには、アカメが腕組みして、立っておりました。

「それで、アカメよ、お前の見立てはどうだ」

囲炉裏の奥に座する髭だらけの男。山賊の頭オグナがそう声を発しました。

「さあてね、まだこの女、何も話してくれないのでね」

不機嫌そうにアカメが言います。

「へっ、身ぐるみ剥いじまえば何かわかるさ」

「そうだそうだ」

男共が下品に笑います。

「お黙りよこの山猿共」

「なんだとう」

「いい気になるんじゃねえぞこの」

アカメの挑発に男共が吼えます。

「やかましいわい」

オグナが盃を、男のひとりに投げつけます。一同しんとなりました。

「言っておくがアカメよ、もし身代金でもせびり取れそうなら、さっさと仕事をする事だ。そうでなければその女、ここに置いておく必要はないからな」

オグナは不機嫌そうに、アカメに申し渡します。

「判ってるよ」

アカメも不機嫌そうに、返事をいたします。

「おら酒だ酒だ」

男共はまた騒ぎ始めます。

土間にへたりこんだ女は、じいとその様子を見ておりました。

が、やがて、妙なものに、気が付いたのでございます。

「なあお」

オグナの膝の上で、柔らかそうな毛皮が、むくり、と動きました。

そうして、妙な声を発して、女のほうを向きました。

ふたつの眼が、きらり、と光ったのでございます。

「あ、あれは」

思わず女は声を上げました。

「どうしたんだい」

アカメが聞きますと、

「あれは...ネコ」

「ネコ？」

「ほう、女、この奇妙な生き物を、知っておるのか」

オグナがその生き物を撫でながら、女に話しかけました。

「先だって、街道を通る商人の一団を襲ってな。その荷の中に、これが居たのさ。初めは暴れるわ引っ掻くわで難儀したが、ほうれ、今ではすっかり俺のもんだ」

ネコと言われたこの生き物は、オグナに撫でられて、眼をゆっくりと細めました。

「俺ぁこんな生き物を見たことがない。タヌキでもなければオオカミでも、キツネでもない。すっかり人に懐くでもなし、かといって離れて山に帰るでもなし。まこと、不思議な生き物よ」

女はオグナが語るのを、じいと聞いておりました。

「頭、そいつ、裏山でヘビを食うてましたぜ」

「ネズミもな、頭からがぶりとな」

「その顔といたら、おおこわいこわい」

「まるでアカメの怒り顔だぜ、えへへへへへ」

男共がまた騒ぎ出します。

それに構わず、オグナは女に語るのです。

「女よ。お前は、どこぞの武家の娘か何かだろう。それがそんな襦袢を着て重い荷を背負って、一体何処へ行く積もりだったんだ」

「...」

「女の足で、この峠を越えて佐久の郷まで辿り着くのは辛かろうて」

「...」

「大人しく身の上を明かすなら、このアカメが間に立って取引してやる。お前もその赤子も、金さえ貰えれば傷ひとつ付けずに送り届けてやろう。どうだ」

「下賤の者と取引などせぬ」

女が初めて口を開きました。

オグナはじいと女を見据えて、話し続けます。

「ふん。確かに俺達は、地べたを這いずり回るムカデ同然だ。生きるためにや何でもするさ。商人だろうが武士だろうが、坊主だろうが朝廷の使いだろうが、何でも襲う。勿論、大軍を差し向けられちゃ敵わねえから、程々の稼ぎで我慢するのさ。そうやって日々殺し殺される獣共の群れの中に、お前は今居るんだぜ」

ぎらぎらと、男共の眼が光って、女を睨みます。

「もし取引に応じねえんなら、お前は只の慰み物だ」

がばとオグナが立ち上がり、膝の上のネコはひょいと板の間に降り立ちます。

男共もオグナに続き、ぞろりぞろりと立ち上がり。

じいと女を睨みます。

女は怖ろしさにすくみ上がって、赤子を掴む手を不意に緩めました。

「そらっ」

すかさずアカメが、赤子を袋ごと取り上げます。

「何をする」

縋る女をアカメは蹴り飛ばし、袋から赤子を取り出すと。

紫紺の産着に縫守。その懐には、一通の書付が、挟んでありました。

勢いよく進み出たオグナが、その書付を囲炉裏端に照らします。

「ふうむ...成程な」

にたりと笑ったオグナは、

「この赤子は使える。女は薪小屋にぶち込んでおけ」

と叫びました。

男二人が女を抱え上げます。

女は激しく暴れ、喚きながら、男共に連れて行かれました。

そうして赤子を抱いたアカメが、その後続きます。

月が細い谷を照らし、フクロウの音が、響いておりました。

\* \* \* \* \*

薪小屋に放り込まれた女は。

「あたしはこの女と話がある。あんたらは戻りな」

そう言って男を下がらせたアカメに掴みかかります。

「その子を、返せ、かえして」

「五月蠅いねッ」

平手で打たれて、女は地べたに伏し、低く嗚咽を漏らします。

「あんた、馬鹿だね」

アカメは低い声で、女に語ります。

「あたしらみたいな山賊に捕まらなくとも、この先、難所だらけさ。オオカミに襲われるか谷底へ落ちるかして、この子もろともおっちゃんじまうのが関の山だよ。あんた本気で、その細い足で、山越え出来ると思っていたのかい」

女は返す言葉無く、只伏して泣くばかりでございます。

「それにこの子が、猛将の名高い長野業正のご落胤とはね。書付の宛名の弾正忠ってのは、武田に寝返った真田幸綱かい」

はっと女は顔を上げ、アカメを見遣ります。

「益々判らないね。武田晴信がその子を生かしておく筈が無いじゃないか。あんた、それを何とか出来る見込みがあったのかい」

「なあお」

何時の間にか、アカメの足元には、あのネコという生き物が居りました。  
時折きらりと光る眼で、女を静かに、見据えております。

「...僅かの望みがあればこそ、其処に賭けるしかない。戦とはそうしたもの。戦とは、男共だけのものではない」

低く呟くように、女は言います。  
そうして、アカメを見遣って尋ねます。

「...そなた、山賊風情で、何故そのような事を知っておる。このような山奥で、何故武家の内情まで」  
「さあてねえ。あたしは只奪うだけでは飯が食えないのでねえ。ま、峠を行き来するのは人や物だけではない、と言って置こうかね」

ふふん、とアカメは鼻で笑って、足元のネコを見て言います。

「あたしは、こいつと一緒に。上野のさる城主の屋敷に潜り込むために山越えをしていた時、山賊どもに襲われた」  
「えっ」  
「十になる頃だった。他の仲間は皆殺されたけど、若い女手が欲しかったのだろうねえ。鎖で繋がれて、さんざん働かされたよ」  
「...」  
「だがね、あたしは小さい時から叩き込まれた狩りと殺しの術で、頭に認められたのさ。今じゃあたしに楯突く男共はいないよ」  
「...まさか、そなた」  
「そうさ。物心ついた時から、諏訪湖のほとりで鍛えられた。あたしはシノビさ」

呆然と、女はアカメを見ております。  
するりとアカメは屈み込み、女をじいとして、囁きます。

「ここに居ても、あんたは殺されるだけだ。判ってるんだろう。なら何故取引に応じないんだい」

女は唇をぎゅうと噛み締めます。

「...私には...助けなど来はしない。長野も真田も、私などはどうなっても...」

眼からは大粒の涙が零れます。

「...そう、私は名もない虫けらに過ぎぬ。そなた達と同じ、いやそれ以下の...」

アカメは女の涙が、月明かりに光るのを見ておりました。

ネコも、涙の落つるさまを、見ておりました。

女は言います。

「しかし、この子は違う。いずれ世に出て大きな働きをする。私はそのために今日まで、堪えてきたのだ。頼む」

女はアカメに縋ります。

「頼む、この子は、この子だけは殺さずにいておくれ。お願いだから」

「安心しな、この子は死なせないよ。頭が使えると決めたんだからね」

「信じて良いのか」

「それはあんたの勝手さ。ただこの子には、どうやら、生きる理由がありそうだ」

アカメは立ち上がり、腕の中の赤子を見て言います。

「三日前に赤子を亡くした女がいる。それに面倒を見させよう。山賊の生き方、人の斬り方は、あたしがみっちり仕込んでやるさ」

そして、再び女に言います。

「逃げたいなら逃げるがいい。男共は、あんたが逃げられないと踏んで、見張りも付けられないようだからね」

「...そなた、何故そのような...」

「ふん、あのいやらしい男共に、あんたが手込めにされるのを見るのが嫌なだけさ。それに、ここから出たところで、生き延びられる保証はないからね」

「...」

「運がよけりゃ、生きて佐久まで辿り着けるだろうさ。せいぜい、頑張ってみるこった」

そう言って立ち去るアカメの姿を、女は只黙って見送りました。

そうして。

「なあお」

ネコは、女の顔を一瞥し、尻尾を揺らして、出て行ったのでございます。

\* \* \* \* \*

明くる日。

山賊の男共が、谷底で何かを見つけました。

「ああ、こりゃ昨日の女だ」

「落ちたのか」

「けっ、死んじまっちゃ何にもならねえ」



男共は、口々にそう言い合って、女の屍体を見ておりました。

それを遠くの木の上から。  
アカメが見つめておりました。

「まったく、神も仏も、ありゃしないね」

そう冷然と言い放つアカメの眼には。  
謎めいた光が、宿っておりました。

時は移り、永禄九年、正親町天皇の御代。

上野と信濃の国境、谷の奥に暮らす山賊共は、相も変わらず、商人や軍勢の補給隊を襲っては、日々を食いつないで  
おりました。

その中に、ひとりの若者。

「ぐはっ」

手練れの女に蹴り飛ばされ、鋭い目をした若者は、

「くっそう」

土にまみれた顔を、ぐいと手の甲で拭いました。

「どうしたね、そんなことじゃ、武田のシノビにゃ手も足も出ないよ」

若者の名はオウギ。年の頃は十七八というところ。山賊のもとで育てられ、殺し奪う日々明け暮れておりました。  
オウギに剣術の稽古をつけるはアカメという女。齢四十に届かんとし、円熟味を増した剣術は衰えを知らず。  
アカメは、オウギの幼い頃から、熱心にシノビの術を稽古しているのでございます。

「おら、もうお終いかい」

アカメに挑発されて、オウギは奮い立ちました。

「けええっ」

鋭く踏み込み、一気に間合いを詰めてまいります。

アカメが左に躲すと見るや、左の手に持った短刀で斬り上げ、それが打ち払われると、

「もらったあ」

その反動で身体をぐるりと捻り、逆手に持った右手の短刀が、死角からアカメに迫ります。  
オウギは勝ったと確信いたしました。しかし。

ぶうん

オウギの短刀は空を切り、

「ほう、やるもんだね」

背後にぴったりと吸い付くように立ったアカメの短刀が、喉元に突きつけられておりました。

「ぐっ」

「狙いはいいさ。考えも悪くない。ただ動きが無駄だらけだ。殺気ばかりが前に出ては、獲物は仕留められないよ」

どすんと背中を叩かれ、オウギは蹠踉めいてアカメから離れます。

「ほら、あれをご覧」

アカメが顎をしゃくった先には。  
年老いた一匹のネコが、じいと何かを見つめて、座っておりました。  
そうして、腰をひくりと震わせたかと思うと。  
一瞬のうちに藪の中へと飛び込んで。

「ああ」

一匹のネズミを、得意げに啜えて出てまいりました。

「最短距離を無駄なく動き、少ない手数で相手を倒す。よく見倣うこったね」

アカメは何度となく、ネコという生き物の狩りを、シノビの術に喩えるのでございます。

「さあ、今日はここまでだ。裏で薪を取って来な」

そう言い渡されて、オウギはぶはあ、と息を吐きました。  
次第に厳しさを増すアカメの稽古に、オウギは疲れ果てていたのでございます。  
何故自分だけに、アカメは厳しく教えるのか。他の男共は自分をただ虐めるだけなのに、アカメと頭のオグナだけは、何故自分を鍛えようとしているのか。  
全く判らないまま、日々が過ぎてゆくのでございます。

よろよろと裏山へと向かってゆくと、あのネコが、丁度ネズミを食い終えたところでございました。

「オキビやい、もう飯は終わったのか、いいなあ」

オウギはそう言って、ネコの頭を撫でました。  
うっすらと灰のかかった、ふさふさとした長い毛を持ったこのネコを、オウギだけが「オキビ」と呼んでおるのでございます。  
囲炉裏の灰の色に、その毛皮が近かったからでございますか。  
オキビは舌なめずりをしながら、オウギの手に顔を擦り付け、満足げにぐるぐると喉を鳴らします。

まだ赤子の頃、この山賊の住処に拾われたというオウギ。同じ頃、略奪した商人の荷にあったというオキビ。  
似た境遇を思っただけか、オウギは幼い頃から、オキビを遊び相手にして育ちました。毛皮の艶は次第に失われ、老境にありといえども、オキビは元気にネズミ獲りに精を出し、それがオウギの励みにもなっておりました。

「さあて、薪、薪と…」

オウギが再び立ち上がり、裏山へと歩を進めたその時。

「かっ、頭あああ」

遠目のガマと呼ばれる男が、山道を駆け上がってまいりました。

「なんでえどうしたい」

「サルにでも引っ掻かれたに違いねえ」  
「イノシシに尻でも突かれたんだらうよ」

男共は、いつも臆病なガマを見てそう笑います。  
しかし、ガマの慌て様たるや尋常ではございません。

「頭、きつ、来た、来た来た来た」  
「慌てるねいガマ。何が来たんだ」

囲炉裏端に座す白髪の頭オグナに問われて、ガマは口を震わせながら言いました。

「たけ、たけ武田の、軍勢が、三百ほど」  
「なにい」  
「藪を分け入って、こっ、こっちに向かってきやす。」

オグナはぎろりとガマをねめ回し、ぐうと唸って、立ち上がります。

「何故だ。奴等、こんな辺鄙な処に軍勢を回す余裕があるのか」

じつとりと脂汗を滲ませるオグナに、アカメが応えます。

「露払い、って処かね」  
「なんだと」

「武田の奴等、今度ばかりは本気で上野を、箕輪城を落とす積もりなのさ。何時ものように、あたしらに尻を突かれ  
ては、おちおち城攻めも出来ないって、そういうことじゃないのかえ」

「くっそう、この間の斥候を殺しちまったのが祟ったか」  
「過ぎたことはどうでもいいさ。頭、どうするんだい」  
「抗うしかなかろうよ。それが俺達の生きる途だ。おい野郎共！」

オグナの号令に、男共は飛んでまいります。

谷を登る軍勢に石を落とす用意をし、弓使いは西の崖から狙い撃ち、斧使いは北の藪で待ち伏せ。それぞれが指示に従って動きます。

「アカメ、奇襲の指揮を任せる。オウギも一緒に行け」  
「あいよ」

オウギとアカメは、山賊の剛の者達の殿について、藪の中に、身を潜めたのでございます。

\* \* \* \* \*

「来たぞ」

斧使いのゴウゾが低く唸ります。

藪の陰から見ると、漆黒の具足に身を包んだ武田軍の兵が、ざわざわと登ってまいります。

アカメが静かに手を挙げ、鋭く振り下ろすと、激しい地響きを立てて、幾つもの大石が、転げ落ちて行きました。  
兵達は、大石に弾かれ轢き倒されて、散々に打ちのめされております。

「へっへへ、やったぜ」

ゴウゾはほくそ笑んでおりますが、

「妙だね。奴等の先鋒はこれっぽっちかい。後続の部隊が見えない。孤立しているのか、それとも…」

アカメは訝っております。大石を落とされた敵兵は、奇襲に狼狽えておる様子。  
すると、ゴウゾはがばと立ち上がり、

「ようし、そこでおたついでる奴等から、血祭りにあげてやる」

と叫びます。

「こらゴウゾ、およしよ。まだ始まったばかりなんだからね。伏せ勢がいるかも知れないだろ」

アカメが制しますが、ゴウゾは聞き入れません。

「何言ってやがる。こちとら奴等の頭をかち割りたくて、うずうずしてんだ。始末が済んだら直ぐに戻ってくるさ」

「お待ちしたら」

「うるせえっ、おらぁ野郎共、いくぞお」

雄叫びを上げて、ゴウゾと斧使いの男共は、谷へと駆け下りて行きました。

「ちっ、血の気が多い男はこれだから困るよ」

アカメは舌打ちしながらも、不安を拭えぬ様子でございます。そして、

「オウギ、尾いて来な。あのイノシシ共を援護しなきゃね」

と、オウギを連れて、藪に隠れながら、谷を下りて行きました。

\* \* \* \* \*

ゴウゾと男共は、逃げ遅れた兵共を薙ぎ倒しておりました。

「わははは、武田の軍勢とはこの程度か」

返り血を浴びながら、ゴウゾは手斧で、すっかり怯えあがった兵共を叩き割ってゆきます。

「あのお調子者め」

アカメは苦々しく、その様子を見ておりましたが。  
すいと目を細め、沢の北側の崖を、じいと見ました。

「あれは...なんだ」

アカメは気付きました。

そのとき。

「ふん、手応えがないのう」

ゴウゾは倒したばかりの兵を、足でごろりと仰向けに返しました。

「む？」

よくよく覗き込んで見ると。

その顔には見覚えがありました。

「これは...炭焼きのゴヘエ」

ふと、その横に斃れた男を見ると、

「こいつは、泥田のトメじゃねえか」

武田の先鋒と思っていた兵達は。

麓の村の住民だったのでございます。

「くっ、ま、まさか囷か！」

「ゴウゾ！ かがんで頭を低くしな！ 奴等が」

アカメの叫びが届く間もなく、鋭い爆裂音が鳴り響き。

何かに貫かれた男共は、ばったばたと斃れてゆきました。

「鉄砲か！」

アカメは目を見開きました。

「アカメ、鉄砲ってなんだ」

オウギが問います。

「南蛮渡来の武器さ。矢の代わりに鉄の弾を撃ち込むんだ。くっそう、あの距離じゃ、鳥打ちの弓では届かない」

搾り出すようにそう言うと、アカメは男共に叫びます。

「頭を低くして、藪に紛れるんだ！ 奴等が撃って来るまで間がある」

しかし、得体の知れぬものの逆襲に、すっかり怯えてしまった男共、ある者は足をひきずり、ある者は斧を投げ捨てて、慌てふためいて逃げてゆきます。

再び、激しい音が谷間に響きますと。

狙い撃ちされた男共は、血を噴き出して、崩れ落ちてゆきました。

すると、音のしたほうから、黒い具足の兵共がわらわらと湧き、こちらに向かってまいります。

「今度は本物の武田の兵だ。しかも百足衆とは。これでは勝てない」

アカメの押し殺した声に、オウギはただ驚くばかり。

「勝てないって、そんな」

「無理だ。奴等は武田軍の精鋭さ。もう逃げるしかない」

迫り来る武田の兵に、西の崖から矢が放たれますが。

前進して来た鉄砲隊から、二度、三度、鋭い音が鳴り響き、弓使いの者共は、崖から次々に落ちてゆきました。

「オウギ、時間を稼ぐよ。先頭の二人を仕留めな」

「う、うん」

オウギはアカメに言われたとおりに、藪の中を進みます。

音を立てずに。獣のように。一匹のネコのように。

そうして、列の先頭にいた兵に、左脇から音もなく、斬り掛かります。

声を上げる間も無く、胴当ごと腹を割られて倒れゆく兵の陰から躍り出たオウギは、もう一人の兵の喉元をひと突き

。

突然の襲撃に動揺する兵達に向かって、アカメは、目潰しの粉袋をぶつけます。

「うわっ」

「目が、めがいてええ」

先頭が混乱し、兵列が立ち往生する間に、オウギとアカメは藪の中を駆け上がり、頭オグナのもとへと、走ったのでした。

\* \* \* \* \*

「頭！ 駄目だ、奴等には敵わない」

「なにい」

「ゴウゾもガマもやられた。早く逃げたほうがいい」

オグナは自慢の大太刀を掴み、立ちすくんだまま震えておりました。

「くそう、これまでか」

「頭、はやく」

「逃げて何処へ行けてんだ、おう、アカメよ」

ぎろりとオグナに睨まれ、アカメは言葉を失いました。

「お前やオウギは、生きてゆけるだろうさ。何処へ行ってもな。しかし俺は、生まれついで山賊よ。今のまんまで、山から下りて生きるなんざ、できっこねえ」

軍勢の迫り来る音が、山賊共の悲鳴が、近くなってまいります。

「オウギよ」

「な、なんだい頭」

「お前には、夢を見させてもらったぜ」

オグナ言葉に、オウギは首を傾げるばかりです。

「持ってゆけ」

オグナがオウギに渡したのは、一振りの短刀、それに細長い竹の筒でございました。

「お前の母が見た夢だ。俺もな、それに便乗させてもらおうと思ったのだが」

くっくく、と、オグナは押し殺した笑いを発して、

「矢張俺には、こんな死に様がお似合いだ」

「頭！」

「アカメ、オウギを生かしてやれよ。後のことはお前に任せる」

と、アカメに申し渡します。

「ふん、勝手なもんだね」

「ほざけ」

言うが早いか、オグナは大太刀を、ずるずると抜きました。

「じゃあな」

そうしてオグナは、長い白髪を振り乱して、武田の兵へと、躍りかかって行ったのでございます。

「頭あ！」

「行くよオウギ」

「だって頭が」

「さっさと行くんだよッ」

オグナが突進したことで、武田の兵に、僅かな隙が生じました。

オウギとアカメは、その隙に乗じて、寄せて来る兵を斬り捨てながら、必死に血路を開き、逃げました。

オウギはこのとき初めて、ただ殺し合うだけの、戦場というものの中に、身を置いたのでございます。

\* \* \* \* \*

この谷の戦いで、山賊の住処に生きる者五十四名のうち、生き残ったのは、僅か八名でございました。オウギとアカメのほかは、年端もいかぬ子供が二人。乳飲み子とその母。そして深傷を負った遠目のガマ。彼等は住処の裏山や林の陰に隠れて、九死に一生を得たのでございます。



「頭はね、お前を使って、山から下りる機会を窺っていたのさ」

焼き払われ崩れ落ちた小屋を見つめながら、アカメはオウギに話しました。

今まで黙っていた母のこと。

そして、頭オグナの狙いも。

「その竹筒に入った書付は、オウギ、お前の出自を明らかにするものだ。成長したお前を立てて、箕輪城の長野か、武田に与した真田か、どちらかに肩入れすれば、惨めな山賊暮らしから仲間を救えると、そう思ったんだろうね」

「そんな...俺が、殿様の子だなんて」

自分が、名高い猛将長野業正の庶子だと知って、オウギはただ驚くばかりでございます。

「信じる、信じないはお前の勝手さ。しかし、ここに証拠がある、そしてお前は、これを自分の考え如何で、どうとでも使える」

「俺の、俺の考えで」

「そうさ。お前が信じるようにやればいい。今どちらかにつけば、それなりの待遇は得られるだろうさ。勿論無視したって構わないがね」

「あ、アカメは、どう思うんだい」

問われて、アカメは目を丸くしました。

「あたしに、そんなことが判るもんかい」

「だって、アカメはいろいろ知っているじゃないか。薬売りに化けた女シノビや、山を回ってる木地師達から、いろんな話を聞いてるじゃないか。なあ、俺はどうしたらいいと思う」

「さあてねえ」

アカメは目を伏せ、少しの間考えておりましたが。

「箕輪城主の長野業盛、つまりお前の腹違いの兄だが、父の業正が死んでからは、家臣団をまとめるのに苦労しているよ。それにひきかえ、武田方は晴信の辣腕で着々と足場を堅めつつある。切れ者の真田幸綱もついている。どちらが優勢かは明らかだが、ね」

「おいこらっ」

頭に布きれを巻き付けたガマが、声を上げます。

「アカメ、お前何を言ってるんだ。武田は俺達を襲った仇じゃねえか。なんでそいつらに味方しなきゃなんねえんだおい」

「五月蠅いね。武田は目の前の石ころを蹴飛ばしただけだよ。あたしら石ころに、仇を討つなんてことが出来るもんかい。それよりも、明日生き延びることを考えな」

「ふんっ」

ふて腐れたガマを見遣って、オウギは頭を悩ませました。

手の中にあるのは、見事な造りの短刀。そして、長野業正の客人として迎えられ、その後武田に出奔した武将、真田幸綱に当てられた書状。

そちらに与しても、生きておられるかどうかは判らぬ。

それに、異母兄の業盛とも闘わねばならぬ。  
しかし。

母は何故追い出された。  
自分が望まれぬ子だったからか。  
アカメは、母が必死に山を登って来たと言った。  
襤褸を着て、泥まみれになって。  
父とは何者だ。兄とは。

頭の中を、血腥い渦が巡りました。  
頭を抱えて、オウギは、蹲りました。  
どうすれば。

「なあおう」

鳴き声が聞こえました。  
振り向くと、灰色の毛に煤をたっぷりつけて、ネコが。  
オキビが、ひょこひょこと、歩いてまいりました。

「おう、オキビやい、無事だったのか」

オウギはオキビを抱きしめます。  
オキビはぐるぐると喉を鳴らします。  
アカメはそれを見て首を振り。  
ガマは、へん、と鼻を鳴らします。

「なあおう」

そうだ。  
こいつのように、付かず離れず。  
流れに任せて、生きてみよう。

オウギは、そう思ったのでございます。

「行こう、真田のところへ」

目指すは真田幸綱の統べる城。  
吾妻の、岩櫃城でございます。

オウギは生き残った者達と、ネコのオキビを連れ、稲倉、牛伏の山道を抜け、鎌倉街道まで出てまいります。そこから旅芸人の一座を装って、アカメを先導に、オウギを殿にして、烏川、利根川のほとりを歩きます。榛名の山をぐるりと周り、岩櫃山へと辿り着いたのは、ひと月ばかり過ぎた頃でございました。岩櫃城。断崖絶壁に護られた、難攻不落の山城でございます。

山の麓の番兵に、アカメが何やら囁き、懐に銭を滑り込ませます。

そうして、オウギの持っていた母譲りの短刀を手渡し、宜しくお頼み申します、と跪くと、番兵はいそいそと、城への道を登ってゆきました。

程なくして戻って来た番兵は、一行に、付き従うよう厳かに命じ、オウギ達は、城の中へと進んだのでございます。

\* \* \* \* \*

「懐かしき物を見たぞ。アカメとやら。して、それなる男がこの刀の持ち主だと申すか」

件の短刀を膝に置き、大儀そうに言葉を吐いたのは、真田幸綱、のちの幸隆と名乗った、武田方の知将でございます。

「はい」

「ふむ、確かにこれは、儂が長野殿の客人であった頃、箕輪城の上泉信綱殿に差し上げた刀だ」

館の前で、多くの兵士に囲まれたオウギ一行は、異様な空気にちぢこまっておりました。

オウギはオキビを肩に乗せ、只目を地に落としたまま動けずにおりましたが。

アカメは何事もないというふうには、冷ややかな面持ちで、幸綱に相對していたのでございます。

「北条の軍勢に攻められて、住処を失い、上野まで逃げて参ったとな」

「はい」

「ふむ。だが、これだけでは信用出来ぬな。その方等が只の山賊で、箕輪城から落ち延びたその女子から、これを掠め取ったとしても不思議はないぞ。真偽の程が明らかでないならば、その方等、即刻斬り捨てねばならぬ」

ぎろりと幸綱はアカメを睨みます。

「それについては、今ひとつ証がございます」

「ほう」

「ほらオウギ、書付を出しな」

アカメに言われて、オウギはおずおずと、懐の書付を取り出しました。

それを兵のひとりが取り、幸綱に差し出します。

幸綱、それを見て、ううむとひとつ唸ります。

「では、ここにある左脇の黒子とは」

「は。オウギ、見せておやりよ」

オウギは、言われるままに左の脇を開きます。

そこには、大きな黒子が、書付のとおりの位置に。

「なるほどのう」

幸綱は目を細め、オウギを見遣ってにたりと笑います。

「よかろう、その方等を信ずるとしよう。それなる男が、亡き長野業正殿の嫡男、業親であるということもな」

その言葉に、一同安堵いたします。

幸綱、更に言うことには、

「ときに、アカメとやら。そちはシノビか」

「はい」

「生まれは」

「定かではございませぬ。望月様の縁を頼って、甲賀の郷から参りました。諏訪湖のほとりで修業を積みましてございます」

「ほほう、今は何処ぞの配下におる」

「何処にも。私は求めに応じて口伝えをする、止まり木でございました故」

「成程、それは重畳」

アカメの話聞き、満足そうに、幸綱は頷きました。

そうしてオウギを見て言うことには、

「オウギと申したな。いや、これからは業親と呼ぶことにしよう。業親よ。そちは腕は立つのか」

突然問われて、オウギは何と云うてよいやら判りません。

するとアカメが、横から口を挟みます。

「シノビの術は、私が教え込みましてございます。未熟ではございますが、お役には立てるか」と

「ふぬう。よろしい、では今一度聞くぞ、業親よ」

幸綱は鋭い眼光で、オウギを射貫き、再び問います。

「赤子の頃に生き別れたとはいえ、そちは箕輪城主長野業盛の弟ということになる。今更我が軍勢に与して良いのか。血を分けた兄と、殺し合いが出来るのか」

オウギは、心の底まで見抜かれるような眼に、たじろぎながら答えを探しました。

「どうじゃ」

アカメは、少々焦れながらオウギを見遣ります。

やがてオウギは、ぼそりと呟くように言いました。

「俺は、会ったことのない兄になど、何の義理も感じちゃいない」

「ほう」

「俺が今ここにあるのは、仲間を救うため。他に理由などない」

「ふっ」

幸綱、オウギの答えに、頬を震わせて笑います。

「ふはははは、よいよい、それでこそ乱世に生きる男というものよ」

そうして、ずいと身を乗り出し、オウギに向かって語ります。

「戦国の世を生き抜くには、仲間を護るにはのう、血筋や義理に流されず、趨勢を読み解く事が肝要じゃ。時には縁ある者共とも刃を交えねばならぬ。調略と称して裏切らねばならぬ。判るか」

オウギは答えることなく、只幸綱の眼を見ております。

謀略と裏切りに明け暮れる幸綱の眼は。

獲物を睨むネコのように、光っておりました。

「その方等には小屋をひとつ与えよう。ただし女子供とて容赦なくこき使うからその積もりでおれ。それともうひとつ」

幸綱、すいと目を細めて問うには、

「その方等、一同の名はなんという。山里に住まう武芸者ならば、自らの名を持っておろうが」

「えっ」

オウギは口籠もりました。

名も無き山賊稼業に、名などあるはずがありません。

アカメが口を挟もうといたしますが、幸綱がそれを眼で制しました。

「どうした。それともその方等、矢張只の山賊か」

オウギは地に目を泳がせました。

答えねば。しかし。

「なあおう」

突然、肩の上のオキビが、声を発しました。

一同驚き、幸綱もまた、目を皿のようにして、オキビを見ました。

咄嗟に、オウギの口から出た言葉は。

「や、山猫衆」

「なに」

「俺達は、山猫衆だ」

アカメは呆れた顔でオウギを見ましたが。

「なんとも奇態な。はは、山猫衆とな。はははははは」

館に幸綱の笑い声が響き、

「なあおう」

オキビはまた、高く啼いたのでございます。

\* \* \* \* \*

岩櫃城に入ってふた月ほど過ぎた頃。

アカメとオウギは、幸綱に呼ばれて、軍議の末席にありました。

いよいよ、箕輪城攻めが、始まろうとしていたのでございます。

「長野は寡兵とはいえ、箕輪城は守り堅き城じゃ。徒に多くの軍勢を繰り出すだけでは、大被害が出るは必定。易く勝つには、城の内部に間者を送らねばなるまい」

敵将の家臣を調略し、潜入者の助けによって城を攻めるは、幸綱の得意とするところでもございました。

「そこで、業親、そちの出番じゃ」

幸綱の言葉に、おう、と座す者共から声が上がります。

このふた月というもの、オウギとアカメは、城の手練れた者共と幾度となく手合わせをし、一度も負けたことがなく、その武芸には、皆一目置くようになっていたのでございます。

「業親、そちはアカメと共に、同族の誼を得て箕輪城に入れ。我等が軍勢を整えた後、合図と共に内部に混乱を起こす。それに乗じて我等が一気に城を攻め破る。堅き城も、内から攻めれば脆いものよ。被害は少なく、次なる戦に向けて力を温存出来るというもの」

幸綱の説明に、一同聴き入っております。すると、

「しかし、幸綱様、拙者はまだ信用出来ませぬな」

猛将甘利昌忠が、もっともな苦言を呈します。

「もし業親とアカメが裏切り、長野と箕輪衆の味方となったら、いかがいたします」

「それなら、こ奴らの運も尽きたという事だな」

幸綱は素っ気なく答えます。

「内応者があれば、我等は容易く城を攻められるが、そうでなければじっくり攻めるまでのこと。我等の優位が、たかだか二人の加勢で崩れるものではない。それが判らぬこ奴らとも思えぬのだがな」

「むむう」

一同、幸綱の考えに頷きます。

「どうじゃ、業親」

幸綱に問われて、オウギは憮然として答えます。

「やるしかないだろう」

初めから、オウギに選ぶことなど、出来ないのでございます。

幸綱は、そうであったな、と笑いました。

直ちに、仔細の打ち合わせが始まりました。

\* \* \* \* \*

「おいオウギよ」

その夜、遠目のガマがオウギに問います。

「お前、本当にこれでよかったのか」

オウギは、刀の手入れをしながら、黙って聞いておりました。

「こんなところで、偉そうな奴等の手先になってよう、よく判らねえ争いに巻き込まれてよう」

アカメは、オウギのすぐ横で、壁に背を預け、眼を瞑って立っておりました。

「はあ、おかしなもんだぜ。山賊暮らしをしている頃じゃ、仲間以外の人間は只の獲物にしか見えなかったが」

ぼりぼりと胸の傷を引っ掻き、遠目のガマは呟きます。

「今じゃ、こっちが獲物になっちまった気分だ。それも食うため生きるために狩られるんじゃねえ。よく判らねえ理由で、追い回されているような気がする」

ぱちぱちと囲炉裏の火が弾け、アカメの眼に光が揺らめきます。

「それが戦というものさ。得体の知れない力に動かされて、訳も判らず熱にうかされて、殺し殺されるのさ」

静かにそう言うアカメの声に、オウギは不思議な響きを感じて、顔を上げました。

「おっかねえ。俺あそんなもんに関わるのはまっぴらだ」

「馬鹿言ってるんじゃないよ」

嘆くガマに、アカメがぴしゃりと言い放ちます。

「死んじまったら何にもならないじゃないか。あたしらはオウギについて行くと決めたんだ。生き延びるためにね」

「そうだけどう」

「だったら生きるために何をするか考えてごらんよ。今あたしらは、オウギを助けて、目先の仕事をする事しか出来ないじゃないのさ」

「ふうぬ」

鼻を鳴らして、ガマはごろりと横になります。

その向こうでは、疲れてぐっすり寝てしまった子供等の姿がありました。

オキビはその子供等に寄り添って、くるりと丸まって寝ております。

「あの子達だって、あたしらが裏切れば、犬死にさ」

アカメの言葉に、今更ながらオウギは、自らの重苦しい運命を呪いました。  
幼い頃、オキビと寄り添い眠った日々が、蘇って来たのでございます。  
厳しくも懐かしい山賊としての日々が。  
それが今では、どうだ。  
自分の動きひとつが、親しい者達の明日を動かしてしまうとは。

「アカメ」

オウギは、傍らに立つアカメに呼びかけました。

「なんだい」

「アカメは、どうして俺についてくるんだい」

「どうしてって」

「アカメは、ひとりでも生きてゆけるじゃあないか」

「...」

「俺のことなんか、放っておいても」

「そうはいかないさ」

眼を閉じて、アカメは静かに言いました。

「お前の母親に、あたしは言ったのさ。この子は生きる理由がありそうだ、ってね。その時から、あたしはお前を生かすことに決めたのさ」

「どうして」

「さあてね、女の勘ってやつかね。それとも、哀れな女に、子を持ってぬ自分の身の上を重ねてみたのかねえ」

「...」

「それにね、あの山賊の住処を失って、あたしは初めて、自由になったのさ」

「自由に」

「殺して奪って、顔の見えない相手に口伝で、反吐の出るような悪巧みを伝える生き方から、あたしは解き放たれたのさ。今あたしは、生まれて初めて、自分のためだけに生きているんだ」

オウギはアカメの言葉が、よくは判りませんでした。

そんな呆けたオウギの顔を見て、アカメは微かに笑いました。

「あたしは誰に命ぜられたのでもない、あたしの考えひとつで、お前と生きることにしたんだよ」

「そうなのか」

「だからお前が気に病むこたあない。お前がそうと決めたなら、腹違いの兄に、一緒に会いに行ってやるさ」

「アカメ」

「どうせなら、裏切ってやる前に、たっぷり銭でもせびってやるんだね」

そう言って、ふふふ、と笑うアカメの真意を。

オウギは、まだ計ることができませんでした。

ゆらゆらと夜は更けて。



小屋の中の煤けた空気のなかで、オウギはぼんやりと、何事かを考えていたのでございます。

\* \* \* \* \*

「おう、儂の腹違いの弟を名乗るのは、貴様か」

三日後の午のことでございます。

オウギとアカメは、箕輪城近くの山道で、箕輪衆の警邏に取り囲まれ、城に引き立てられてゆきました。

そうして、縄で縛られたまま、城主長野業盛との対面を、果たしたのでございます。

業盛はこの年十九。若々しい精気に溢れた青年でございました。

「信綱よ、どうなのだ。その書付は本物か」

と業盛が問うのは、上野国一本槍と讃えられる武芸の達人、上泉信綱その人でありました。

「は。間違いございませぬ。拙者に縁深き一色家から、この城に参っておりました女が産んだ赤子が、これなる業親殿  
でございましょう」

「ふむ、それで、それなる女は何者か」

「聞く処によれば、業親殿の後見人として、共に諸国を巡っておりました由」

「そうか。よし、縄を解け」

業盛の命令で、オウギとアカメの縄は解かれます。

「お聞き届けくださり、感謝いたします」

アカメがそう礼を言いますと、

「勘違いするな。このような時期に城へと乗り込んでくる者を、そう易々と信ずるわけにはゆかぬ。この者共の身は  
信綱、そちに任せる。まずは蔵屋敷の奥にでも放り込んで置くのがよからう」

「承知」

信綱が立ち上がり、兵に合図をいたしますと、オウギとアカメは囲まれて、城の奥へと連れてゆかれます。

そうして、大きな蔵のひとつに入れられ、重い扉が閉じられます。

蔵の中には、信綱、そしてオウギとアカメの三人のみ。

「して、その方等を遣わしたのは誰か」

信綱が出し抜けに問うてまいります。

「誰も」

アカメはそう応えますが、信綱はじいとアカメ、そしてオウギを見遣って再び問います。

「その程度の策略を見抜けぬ儂ではないわ。大方、真田殿か春日弾正殿あたりの計であろう」

あっさりと見破られて、オウギは只眼を円くするばかり。

観念したように、アカメが話し始めます。

「上泉様、既に不利を覆す事は出来ませぬ。武田晴信は、貴殿を厚く遇すると約しております。それに今なら、箕輪衆の多くにお許しが出ましよう。御身のため、長野家のため、ここは真田の計に乗ってくださいませ」

「それは出来ぬ」

「何故です」

「武田は世を統べる器にあらず。謀略を以て闘うは良し。されど謀略を以て治める事は易くはない。武田が如何に勢力を拡大しようとも、いずれは衰える。それが判っていて与するのは愚かというものよ」

そう言い放って、信綱はオウギをじい見つめます。

「ふむ、我が姪ハルの息子が、そなたか。良い若者に育ったものだ。父業正様の雄々しさと、母ハルの凛々しさを受継いでおる。ハルは...矢張死んだのか」

アカメが神妙に答えます。

「はい、旅の途中で、谷に落ちまして」

「そうか。不憫な」

堪らずにオウギは尋ねました。

「母は、俺を産んだ母は、何故この城を、出なければならなかったのか」

信綱は、重苦しい言葉を吐き出しました。

「先代業正様の嫡男は、いずれも奥方様の子ではない。跡目争いをこれ以上複雑にはならぬとの仰せでな。ハルは赤子ともども、不作法にかこつけて斬り殺される処だったのだが、拙者が秘かに城から送り出した。真田幸綱殿を頼って落ち延びるように、とな」

「そ、そんな」

「これが戦だ。槍や刀を持ち戦場に立つ者だけが、戦に関わるわけではない。女も子供も、皆、戦の只中にあるのだ。この世とはそうしたものよ」

オウギの胸はかき乱されました。

信綱は続けます。

「いずれ乱世が終わり、太平の世が来る。我等は目先の戦のためだけでなく、太平の世のために何を遺すかを、考えねばならぬ。儂が武田に与することは、徒に乱を呼ぶだけのこと。悪いが話には乗れぬな」

「判らない、判らないッ」

オウギは声を張り上げます。

「なんだ、真田も長野も、そしてあんたも、自分の都合で動いてるだけじゃないかッ。何が太平の世だ。そんなものがあるなら見せてみろッ。俺達の惨めな暮らしは、貴様等の都合で動かされてたなんて、そんな、そんなこと」

そうして、懐から隠し刀を取り出します。

ざらりと刃が光ります。

「おまちよオウギ」

鋭くアカメが叫びます。

「お前ではこの御仁には敵わない。あたしと一緒に、恐らくは勝てないよ」

「なんだって」

「ほほう、いい見立てだのう女。アカメと申したか」

信綱は眼光鋭く、オウギとアカメを交互に睨みます。

「矢張お前はシノビか。ならば仕方あるまい」

ぱん、ぱん、と信綱が手を叩きます。

すると蔵の天井から、するすると四人の男女が下りてまいりました。

農民と変わらぬ襦袢を纏った者達は、蔵の四隅に立ち、じいとオウギ、そしてアカメを見ております。

「こ奴等もシノビよ。その方等には、戦が終わるまで、此処で大人しくして貰おう」

「ちっ」

アカメが舌打ちいたします。

「こ度の籠城戦に勝利すれば、武田は暫くは、上野への足がかりを掴めぬ。上杉勢も加勢にやって来る。そうなれば上杉、北条、武田の三竦みはまだ続く。三者を疲弊させ、勢力の及ばぬ空白地帯を作る事が出来れば」

「出来れば、何なのです」

信綱は、アカメの問いには答えません。

「暫くは殺さぬ。逆らわなければ、の話だがな」

そうして信綱は、重い蔵の扉から、外へと出ていったのでございます。

箕輪城内の蔵屋敷。その一等奥にある、米蔵と思しき土蔵の中で、オウギとアカメは、無為に時を過ごしておりました。

陽が暮れかかった頃、四方をシノビの者共に四六時中囲まれ、オウギは随分と、苛立っておりました。

「くそう、こんな、こんな奴等」

オウギは今にも、シノビ達に飛び掛からんとする勢いでございます。

「静かにおしよ。下手に動いて命を取られたら、元も子も無くなるよ」

アカメが制しますが、オウギの鬱憤は収まらず、積み上がった俵に拳を突き立てます。  
その様子を冷やかに見ていたアカメが、問いました。

「どうだい、実の兄に会った気分は」

「...」  
「頼るべき武将が少なくなりつつあるとはいえ、業盛は立派な城主だね。武芸にも優れ、家臣にも慕われている。ああした男が死なねばならぬとすれば、残念なことだよ」

「判ったような口を利くな」

オウギはアカメを、じろりとねめつけました。

「あんたは何時もそうだった。俺を見下して、いい加減な言葉で俺を騙して、その気にさせて、挙げ句の果てがこの態だ。あんたは一体何がしたいんだ」

「おや、自分の力じゃどうしようもなくなったら、あたしに逆恨みかい。お門違いも甚だしいね」

「五月蠅いッ」

「所詮、お前も殿様の落とし胤ってことかね。自分だけの力じゃ何も出来ない。あの世で母親が悲しむよ」

「その母を襲った張本人のくせに、何をほざくか」

鋭い踏み込みで、オウギはアカメに迫ります。手刀が空を切り、俵にぶすりと刺さります。

「甘いね。無駄な動きが多いと、何時も言っているだろう」

「黙れッ」

オウギは叫びます。手刀を俵から抜きますと、米がざらざらと落ちてまいります。

薄暗い蔵の中に、米の落ちる音が響きます。

「あんたさえ、あの山賊共さえいなければ、俺はこんなことには」

「勝手なことをぬかすんじゃないよ。今になって育てて貰った恩を忘れて、殿様気分になんぞ浸ろうってのかい」

「けあああああッ」

またしてもオウギはアカメに飛び掛かります。オウギの手刀は、素手とは思えぬ切れ味で、アカメの背後に積まれた俵を、どんどん切り裂いていくのです。

ざらざら、ざあざあと、米が床に飛び散ります。

オウギの踏み込む足が、アカメの飛び退る足が、米を踏みつけます。

「おのれえッ」

次第にオウギの攻撃が鋭さを増し、アカメは追い詰められてまいります。

四方で見張るシノビの者共、流石に、兵糧が台無しになっては不味いと、一名は外へと伝令に、他の三名はオウギを取り押さえようと動きます。

しかし遂に、オウギはアカメを追い詰めました。逃げる先へと回り込み、殺気を纏った指が、猫の爪のようにアカメを襲います。

「くっ」

アカメの右の肩から、鮮血が迸ります。

「おい貴様等」

シノビ共がオウギの背後に回った瞬間。

「なにッ」

オウギの姿が消えました。

音も立てずに床にへばり付いたオウギは、旋風のような蹴りで、シノビ共の足を薙ぎ払います。

そこに、アカメの目潰しが繰り出され、

「ぐわああああああ」

両の眼を潰されたシノビ共は、オウギの突きを腹に受け、倒れてしまったのでございます。

「ふう、上手くいったね」

アカメがそう呟きますと、

「アカメ、肩は大丈夫か」

オウギが心配そうに訊いてまいります。

「心配無用さ。本気で来て貰わないと、奴等は欺けないからね」

「でも血が」

「直ぐに止まるよ。さあ、仕事だ」

そうしてアカメとオウギは、蔵の天井裏から、外へと逃れたのでございます。

\* \* \* \* \*

「火事だ、蔵屋敷が火事だぞう」

「早く火を消せ」

城内にあかあかと火の手が上がり、兵達は慌てふためいて消火にあたっておりました。

その混乱ぶりを確かめて、オウギとアカメは、東の曲輪へと向かいます。

「搦手門だよ、急げ」

暗闇の中、オウギとアカメは走ります。

搦手門の前まで参りますと、アカメは番兵に礮を投げつけます。

気を取られた隙に、オウギは兵の只中に飛び込み、刀を奪いつつ斬り倒してゆきます。

櫓からオウギを狙った射手も、アカメの放つ小柄に喉を撃ち抜かれ。

瞬く間に、十数名の番兵は、残らず倒されてしまいました。

「さあ合図だ」

アカメは番兵の持っていた矢を奪い、鏃に布を巻きますと、かがり火を移して、空高く放ちます。

茜色の筋を描いて飛ぶ矢を、真田の陣に加わっていた遠目のガマが、高い木の梢から、いち早く見つけました。

「合図だぞう」

その声と同時に、大きく太鼓が打ち鳴らされます。

城の東に陣取った武田の軍が、ぞわぞわと動き始めます。

「よし、どうやら伝わったようだね」

アカメが額の汗を拭きます。すると、

「そこまでだ」

鋭い声が飛んでまいります。

アカメとオウギが振り返ると、そこには、上泉信綱が。

そして、城の護りの箕輪衆が。

ぞろぞろと、押し寄せて来るのでございます。

「矢張搦手門を選んだか。昼間のうちから武田の兵がうろうろしているのは見えておったわ」

「むっ」

「お主等が動く先を見張っておったのよ。これで攻め来る奴等は一網打尽じゃ。観念せい」

見ると、搦手門から城内へと続く道の周り、曲輪の縁には、次々と兵が集まってまいります。

備えは万全。容易に破れぬ陣容でございます。

アカメは、ふふ、と冷やかに笑います。

「流石だね。寡兵で大軍を破るには、効率よく攻め勢を打ち倒さねばならない。兵の配置、動かし方も見事なものさ」

「その方等も中々の手練れ。殺すのは惜しいのう」

「そうかい。じゃあ、あたしらを使ってくれるかね、信綱殿」

「戯けが」

信綱が手を挙げますと。

兵が一斉に矢をつがえます。

「貴様等の首、仲良く業正様の墓前に備えてやるわ。さぞお喜びだろうて」

無数の矢が、アカメとオウギを狙います。  
オウギは低く構えてじっと動かず。  
アカメは腕組みをして仁王立ち。  
信綱が、にたりと口の端を持ち上げた、その時。

「てっ、敵襲だああああ」

城の北から、攻め勢の雄叫びが、番兵の悲痛な叫びが聞こえてまいります。

「な、何事だ」

冷静沈着な信綱も、予期せぬ城内の混乱に、狼狽えるばかりでございます。

「残念だったね、あたしらは、囷さ」

「なにっ」

「こちらに護りの兵を集めておくために、あたしらは動いたのさ。手薄になった北の馬出口から、真田の精鋭が突入を始めたようだね」

「くっ、ぬ、ぬかったわ」

「武芸では右に出る者がいなくても、知略では真田に及ばぬとみえる」

アカメは腕組みをしたまま、冷やかに信綱を見つめております。

「皆の者、本丸の守備へと急げ！」

信綱は苦々しく叫びます。

「おっと、いいのかい、搦手門が手薄になるよ」

アカメが挑発いたしますと、

「ふん、この門ならば、儂ひとりで十分よ」

信綱が槍を構えます。

流石に上野国一本槍と謳われた武芸者。隙無くアカメとオウギを威圧いたします。

「オウギ、あんたは行きな」

「えっ、行くって」

「兄弟どうし、まだゆっくり話もしていないじゃないか」

「話？」

「業盛が真田に殺されちゃったら、恨み節も吐けなくなるよ。さっさと行って、悪態をつくなり殴るなり、してきたらどうだい」

「そんな、アカメ！」

ずい、とアカメは前に踏み出します。

「ここはあたしが押さえる。勝てはしないだろうが、要は負けなきゃいいのさ」

「アカメ」

「さっさと行くんだよッ」

短く叫ぶと、アカメは信綱目掛けて突進いたします。

鋭い槍の突きを躲し、アカメは刀で信綱の脇に斬りつけます。

しかしその刀は槍の柄で払われ、アカメは横に飛び退って再び低く構えます。

「ええい」

オウギはその横を、一陣の風のように駆け抜けました。

「行かせるか！」

叫んで行く手を阻もうとする信綱の槍を、アカメが払います。

「おっと、相手はこっちだよ」

「女。貴様何故あの若者に加勢するのだ」

信綱が唸るように問います。

「あんたの姪御にゃ、悪いことをしちまったと思ってるのさ。今までさんざん奪い殺して来たが、あん時だけは、何故か悔やまれて仕方なくてねえ」

「むむ」

「罪滅ぼしにゃ、ならないだろうがね。殺すだけでなく、せめて一生に一度くらいは、ひとを生かしてみたいと思うのさ」

「何をほざくか、シノビの分際で」

「あんた言ったね。いつか太平の世が来るってさ」

「ぬうう」

「あたしらシノビにだって、太平の世ってもんを、拝ませておくれよ」

「ふん、ならば力づくで奪ってみよ。そちの太平とやらをな」

「望むところさ」

そうしてアカメと信綱、観る者を圧倒する、激しい戦いを繰り広げたのでございます。

斬撃の応酬が響く搦手門をあとにして。

オウギは物陰に隠れ、兵達を斬り裂きながら。

暗闇を駆け抜ける、一匹のネコのように。

本丸を、目指したのでございます。

\* \* \* \* \*

火の手は二の丸まで回っておりました。

空堀の陰から這い出たオウギは、燃える火の陰に隠れながら、音も無く本丸の屋敷へと、潜り込みます。

屋敷の前には、箕輪衆の重臣と思しき将が数名。その者共に何かを命ずる若い男。

その男に向かって、オウギは一目散に走り出しました。



「なっ、何者」

叫びを上げる間もなく、鋭い当て身と突きを食らい、重臣達はばたばたと倒れてゆきました。  
そうして、あとに残ったのは。

「貴様、生きておったか」

業盛とオウギ。業盛の後ろには女が二人。  
女共の腕の中には、年端のいかぬ子供、そして赤子が、抱かれておりました。  
オウギは息を整えながら、業盛、そして女共と子等ををじいに見つめます。

「実の兄に手向かうとは、罰当たりな奴め」

業盛は太刀を抜きますが、オウギは低く構えたまま、抜こうといたしません。  
そうして、静かにこう言うのです。

「この世には神も仏もない。親も子も」

「なんだと」

「あるのは人、ただそれだけだ。俺はそうして生きて来た」

「ふふん、さぞ惨めに生きて来たのであろうのう。その恨みを儂に向けるのか」

「恨みはない」

「ならば母の仇討ちか」

「そんなものでもない」

「ならば貴様、何故殺す。何故儂に刃向かうか」

「仲間を守るため、日々を生きるためだ。お前にはそれが判るか」

業盛、オウギに問われて眉を顰めます。

「何を言うておる。貴様のような下賤の輩に身を落とした者など、最早弟でも何でもないわッ」

そうして抜いた太刀を構え、オウギに襲いかかります。  
ぎらりと光り、迫り来る刃。  
オウギはそれを静かに躲し、

「くらえッ」

鋭い突きを放ちます。  
オウギの拳は業盛の胴当てを砕き。  
衝撃は臓腑を突き抜けて。  
業盛の身体を、吹き飛ばしたのでございます。

「ぐはあッ」

仰向けに転がった業盛を、オウギは冷ややかに見つめます。

「命が惜しければ、真田にそう言ってみろ。真田は使えると思えばすぐには殺さん」

そう言うオウギに、業盛はゆっくりと立ち上がり、激痛に顔を歪めながら答えます。

「ふん、誰が命乞いなどするものか。武田は儂等を許しては置かぬ。儂も、女共も、この子等も、最早助からぬ」

ひいい、と声を上げ、女共が子等を抱き締めます。

「せめて儂が、この儂が」

「おいッ」

「冥土へ送ってやるわああああ」

落ちた太刀を拾い上げ、業盛は女共に向かって、子等に向かって、振りかぶります。

女共は激しく叫び。

子等は。

母達の胸の中で、微睡んでおりました。

「やめろおおおおおおお」

オウギは業盛の脇腹に、渾身の突きを食らわせました。

骨の碎ける音がして。

業盛は、どさりと倒れ込んだのでございます。

「ひいいいいい」

女共は、子等を庇って泣き叫びました。

オウギは只呆然と、其処に立ち尽くしておりました。が、

「おい」

女共に、問いかけたのでございます。

「その子等を、殺すのか」

「いや、いやです、どうぞ命だけは、この子等の」

女共、只首を横に振り、泣き叫ぶばかりでございます。

するとオウギは、

「すまん」

女から赤子を取り上げます。

「いやああああ」

そして女の鳩尾に、突きをひとつ入れますと。

女は気を失って倒れます。

「なっ、なにをする」

縋る女にも当て身を食らわせ、気絶させますと。  
オウギは、もうひとりの子も胸に抱き、帯で身体に結わえ付け。

「行くぞ」

火の粉が舞い散る中。  
屋敷を後に、疾風の如く、闇の中へと走り去ったのでございます。

\* \* \* \* \*

永禄九年九月。  
北の馬出口から進入した真田の軍勢によって、堅城の名高い箕輪城の護りは崩れ、落城。  
城主長野業盛は、一族郎党と共に、本丸の奥、御前曲輪の持仏堂にて、自害した由にございます。

その箕輪城から南に約一里。  
和田山極楽院という、庵がございました。  
あかあかと燃え落つる箕輪城の火が、朝日に隠されてゆく頃。

「おや、これは」

庵の僧が、戸口の脇に、見慣れぬ布袋を見つけたのでございます。  
その中には。

「なんと、子供ではないか」

仰天する僧が、漸く乳離れしたかと思える子を抱き上げますと。  
その着物には、長野氏の紋であるヒオウギが。  
白く染め抜かれていたのでございます。

この子、即ち業盛の嫡男亀寿丸は、長じて鎮良と号し、この庵の主となりました事。  
世にひろく知られたところでございます。

\* \* \* \* \*

そして。

「こ度の働き、大儀であった」

戦の後、真田幸綱は、生きて戻ったオウギとアカメに、そう労いの言葉をかけました。  
アカメは、上泉信綱と闘っている最中に、搦手門の外から押し寄せた武田の軍勢に紛れ、まんまと逃げおおせることに、成功したのでございました。

「そち等のお陰で、我が軍の被害は最小限に食い止められた。これで我等の関東支配に弾みが付くというものよ」

幸綱は満足そうに笑いましたが、

「ところで、業親よ」

鋭い眼差しをオウギに向け、問うたのでございます。

「我等が本丸を押さえた折、業盛の子と思しき者共の姿が見えなんだ。そち等に心当たりはないか」

「…」

「あの激しい闘いの最中、逃げ出すのは容易くあるまいて。それに屍体も見当たらず。どうじゃ」

オウギは幸綱の眼を睨みつつ。

「業盛の子など、知らん」

短く、言い放ったのでございます。

幸綱、眉を顰めて、何やら考えておりましたが、やがて、ふうと息を吐き、

「褒美をとらそう。何がよい」

と問います。

オウギは、迷う事無く、こう答えたのでございます。

「何もいらない、ただ」

「只何だ」

「旅に出たい。俺達を、自由にしてくれ」

「なんと」

一同、目を丸くしてオウギを見ます。

「出奔したいと申すか」

「勘違いするな。武田にも上杉にも北条にも、何処にも肩入れしない。俺達は」

「なあおう」

肩の上で、オキビが高く啼きました。

「俺達は、山猫衆だからな」

幸綱はからからと笑い、武田の領地の通行許可証を与えて。

オウギらの出立を、許したのでございます。

\* \* \* \* \*

「やれやれ、また旅の一座の真似事か」

遠目のガマが嘆きながら歩きます。

「五月蠅いね。ぶつくさ言ってないでとっとと歩きな」

アカメにこづかれて、ガマはぐへえと声を上げました。

真田の陣から三里ほど歩いた小さな村で、オウギは、一軒の家を訪ねます。  
そうして、布にくるまれた何かを、もそもそと持って参ります。

「なんだあ、おい、こいつあ」

ガマは眼を丸くして、布の中身を覗き込みます。

「預かって貰っていたんだ。旅に連れて行こうと思ってさ」

と言うオウギの腕の中には、赤子が。  
その産着には、ヒオウギの紋が、白く染め抜かれてありました。

「まったく、物好きなこったね」

「うん」

アカメに言われて、オウギは短く答えます。  
親の運命に翻弄され、生か死かの瀬戸際にあった子に。  
オウギは、かつての自らの姿を、重ねたのやもしれません。

「さあ、何処へ行こうかね」

アカメの問いに、オウギは、流れゆく雲を仰ぎ見て。

「山を越えて、西へ」

そう呟いたのでございます。

オウギとアカメ、遠目のガマ、二人の子供に、乳飲み子とその母がひとり。  
オウギに背負われた赤子。  
そして。

「なあおう」

赤子に寄り添うネコのオキビ。  
何とも奇妙な一団、山猫衆は、こうして旅を続ける事に、相成りましてございます。

さても奇なるは人の縁。  
巡り会わずは猫の縁。  
山猫衆の、運命や如何。

それは、次回の講釈に。

完

## 山猫衆

<http://p.booklog.jp/book/25341>

著者：佳(Kei)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gonchan55/profile>  
[アメーバブログ「ねこバナ。」](#)

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25341>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25341>